

■□ 第1部 基調講演

若者が育つ社会をどうつくるか －協同を学び、体感することへの期待－

南出 吉祥(岐阜大学／若者協同実践全国フォーラム)



岐阜大学地域科学部で教員をしながら、子ども・若者支援にかかわる実践および研究をしています、南出吉祥と申します。「若者支援」にかかわる実践者同士のネットワーク組織として、若者協同実践全国フォーラムの理事・事務局長、岐阜で子ども・若者・ひきこもり支援をおこなう仕事工房ポポロ理事・ぎふ学習支援ネットワーク代表理事、そして協同総合研究所の理事もしています。

ちょうどつい最近出たばかりの『協同の発見』2024年6月号に、「『つながり』をあきらめないー若者たちと協同労働」という特集が組まれており、そこに巻頭言として「『ともに場をつくる』経験の保障を」という小文を書かせていただきました。今回のテーマとダイレクトに重なってきますので、参考資料として付けさせていただきました。

全体の基調として、「若者が育つ社会をどうつくるか」とさせていただきますが、「人づくり」の前提として大事なのが、「人」に焦点をあてることよりも、人が育つ「場所」をどうつくるのかという点です。若者が育つ場はどのようにつくれるのか、その探究の結果として人が育っていく、そういう回路を考えていきたいと考えています。自己紹介で「若者協同実践」という団体名を挙げましたが、そこで「支援」ではなく「協同実践」という語を充てているのは、一般的に「若者支援」と言うと、若者は支援される対象だとされがちですが、むしろ大事

なことは「若者と一緒に、若者が生きやすい社会をつくる」こと、そこに仲間として、当事者として若者も参加していくこと、そのことによって、結果的に若者も救われていく。そうした意味合いを「協同実践」という語に込めています。

「基調報告」という形式だと、どうしても一般論・抽象論になってしまいがちですが、ここで話したことを、それぞれの現場に落とし込んで翻訳しながら、皆さんにも考えていただけるといいなと思っています。

1. 「若者」をどう把握するか

最初に、「若者とは誰か？何なのか？」という、若者理解を確認したいと思います。ここを押さえておかないと、若者語りは半端な空中戦に終始しがちなので、まずはその点をお話しします。

(1) 「模索と試行錯誤」の時期という把握

「若者」と言ってもかなり幅は広く、10代から30代くらいまでを指すことも多いのですが、他の世代に比べても、社会的な属性が多岐にわたるという特徴があります。学校で学んでいる人もいれば、働いている人もいるし、子育て中の人、模索中の人とか、いろんな人がいます。だから、それら多様な姿を全部ひっくるめて抽象的に「若者は」と語ってみても、実は何も言えていないし、「ふつうの若者」なんて、ど

こにもいないんですね。そこには、客観的な事実というよりも、「あるべき若者像」という社会的な理念が組み込まれていて、そのハードルが年々上がっているという状況があります。「頑張らないと普通でいられない」という状態は、もはや普通ではないんですが、そうしたまなざしが日々若者たちにも向けられています。

その多様さを踏まえた上で、「若者」をどう捉えるか。一つは、子どもと大人の間、中間もしくは移行期という社会学的な把握。大人にケアされる存在としての「子ども期」と、自分のことは自分で対処する「大人期」の間で、若者は大人になっていく過渡期なんだという捉え方。これは一見フラットではあるんですが、実は危うい部分もあって、「早く子ども期を脱して大人になれ」という自立化圧力を呼び込みやすくなってしまいます。

それに対し、教育学的というか、発達の捉え方というのもあり、その観点からすると、これからどう生きていくかということについて、いろいろなことを選択したり、模索し試行錯誤する固有の時期だとなります。これは「発達」をどう理解するかにかかわりますが、早ければいいというわけでもなく、どこまで豊かな模索をできたかということが、この時期における重要な発達課題となります。いろんなことに挑戦したり模索するなかで、もちろん失敗することもあります。その失敗を「豊かな経験」として積み重ねていける余地が、この社会にどれだけ用意されているか。「失敗したらもう終わり」ではなく、失敗から学んだり、反省して「悔しい」という気持ちを抱いたり、そういった試行錯誤がきちんと保障されるべき時期が、「若者期」だという把握になります。

これはまさに実践的な「若者」把握であ

り、若者に向き合う大人に課せられてくる課題となります。「教育学的」な把握だと言いましたが、職場であっても同様で、職場は「仕事をする」ことが第一目的ではありますが、その仕事を遂行するためには、担い手となる職員が育っていかないといけない。どうやったら人が育つのかということ、各職場で苦心しながら新人育成などに取り組んでいる。その部分で大事にしておくべき姿勢や課題が見えてくる、ということになります。

(2)「実践的な若者理解」の射程

こうした実践的な観点で見えてみると、政策などで用いられる年齢区分で対象を区切ることの危うさが浮かんできます。同じ年齢だったとしても、子育て中の人もいれば、働いてる人もいるし、学校に行ってる人もいるし、一つに括れないんですね。この点は最近政府も気が付いてきたみたいで、新しくできた「こども基本法」だと、年齢区分は撤廃し「心身の発達の途上にある者」と広く捉えています。人は生涯発達し続けるという観点からすれば、この規定もかなり危うい部分がありますが、生きてきた年数だけで区切るよりは、よっぽど穏当な括りになったかと思います。

さらには、「○○さんは若者かどうか」というように、人そのものを全体として捉える見方自体も危うさがあります。たとえば仕事の面ではもう一人前なんだけど、私生活では全然自分で何もできない人、これは仕事の面では「大人」になってるかもしれないけど、私生活の部分では、まだ「子ども」だったりする。人は職業生活だけでなく、家族形成や友人関係、暮らしづくりなど、さまざまな側面での課題を同時に抱えていて、一側面が突出しているからと言って、他の側面が十分成熟しているとは

限らない。こういう目線が大事で、ある人を指して、「この人は若者かどうか」っていうのは、実は乱暴な議論になりがちで、きちんと場面ごとに、丁寧に見ていく必要があります。

たとえば職場だと、「仕事ができる」という観点が重視されますが、「仕事」というのはそもそもかなり複合的な営みでもあります。計画・段取りをつくることができる、計画を実行することができる、連絡・調整ができる、相談やSOSが出せるなど、同じ「仕事ができる」のうちにも、実は多岐にわたる能力がかかわっています。それを「仕事ができる／できない」という二分法だけで見てしまうと、見落としてしまう部分も多くなってしまいます。「できない」と言われてるなかにも、できている部分は当然あるし、できない部分もある。「できない」ことが駄目出しされがちだけど、むしろ「できる」ことを応援しつつ、できないことを他の人がカバーしていく体制をどうつくるかという点が、実践的課題としては大きいのかなと思います。

年齢でも切れないし、仕事だけで切ってもいけないとなると、とても面倒で、一人ひとり具体的に語っていかないとわからなくなる。でもその「具体的に語る」というのがすごく重要で、実は「協同」を考えていく際も、抽象化してしまうと見えなくなるもの、そぎ落とされてくるものがたくさんあるということを考えていく必要があります。

(3) 「社会への新参者」としての若者

あと、やや派生的になりますが、若者には「社会への新参者」という側面があります。「社会」にはいろいろな位相があり、職場や学校、家庭っていうのも一つの社会だと見ることもできる。そういう一定の場

所における「新参者」という立ち位置があります。

その場の文化や雰囲気慣れ親しんでおらず、その場の「あたりまえ」がわからないまま入っていかないといけない苦しさがある。中心から見ると「周辺」であり、的外れな発言が出てしまうなど、劣位に置かれることも多いんですが、逆にポジティブな側面もあって、その場の文化に染まり切っていないことで、古参者には浮かびづらい発想・考え方を持ち込むことができます。

そこを起点にして、硬直化した職場をより豊かなものへと発展させていく可能性が生まれていく。そういう可能性に満ちた存在として、若者が位置付けられることもあります。

この両面性は、社会における「若者語り」全般にも見られる傾向で、「未熟な存在」とみなされる一方、「次代の担い手」として過剰に担ぎ上げられたりもします。どちらも一面しか捉えていないし、極端な話になりがちですが、そうした言説に対し、リアルな実態に即して、きちんと一人ひとりを見ていく必要があるということが、本報告の前提認識になります。

2. 若者をとりまく社会のありよう

(1) 社会の写し鏡としての「若者」像

次に、「社会の写し鏡としての若者」という点について。「最近の若者は〇〇」ということが言われがちですが、これはずっと昔から続いているもので、今そうやって若者語りをしている大人も、昔若者だった頃には上の世代から同じように語られています。

それは「若者について」語っているようでいて、実は「社会の変容」そのものにつ

いて語っているにすぎない、という部分があります。社会は常に変容し続けていて、その変化にいち早く適応していくのが、まだ染まり切っていない若者たちだったりします(古参者は適応しづらい)。そのギャップが、若者を他者化して語ることの背景にあり、社会の変容に対して「若者」を入口にすることで語りやすくしているという側面が窺えます(「草食系」とか「モノを買わない」とか)。

もう一つ大事な点は、「最近の若者は…」と言っている人自身の変容です。そこでは、昔の若者と今の若者との比較が語られることが多いんですが、実はその若者を見てる人自身も変化しているという点は、見落とされがちです。

自分が20代だった頃に見る「若者」と、40代になった頃に見る「若者」とでは、若者の方がまったく同じ状態だったとしても、当然違った認識になってきます。たとえば、自分もまだ若かった頃は、2・3年下の新入社員とも対等に話せたものの、5年10年経って役職も付いたりすると、年齢ギャップも生じてくるし、若者からもフラットに話しかけづらくなっていきます。この違いは、「若者の変化」ではなく、「若者に向き合う自分の変化」なんですよ。人はどうしても自分を中心にして考えてしまうので、自分の変化は見えづらく、他者の変化を追いがちになってしまう。それは大人も若者も同様なんですが、「語れる側」にいる大人と、そういう機会を持ちづらい若者との力関係の差が、「若者の変化」ばかりが強調されることの背景にあります。

(2) 若者はどんな社会に生きているのか

こうした「若者認識」は、具体的な内容の話というよりは、スタンス・立ち位置にかかわる前提認識となりますが、「若者を

問う」というだけでなく、「若者がどんな場・社会に生きているのか」をきちんと捉えていくことが求められてきます。

そこから、ちょっと大きな話になってしまいましたが、社会全体の趨勢について、「協同」という観点から確認してみたいと思います。

社会の近代化のプロセスは、職住分離や業務の分業を進めていく体制整備にあり、それが効率性を高めていく側面がありますが、その裏面で「協同」が失われていくものでもありました。雇う／雇われる、売る／買う、教える／教えられる、支援する／されるなど、いろんな現場で立場を整理・分担することで、物事を進めやすくするという効果は大きなものがありますが、そこに権力関係や支配・服従の構図が生まれたり、相互のやり取りや交渉、対話の契機が奪われてしまったということも生じてきます。

たとえば農村社会では、働くことと暮らすこと、地域をつくることは混然一体・不可分なものとなっていて、そこにはあたりまえのように「協同」が根付いてもいた(同時に、明文化されない権力関係も展開されていたりもしますが)。その混然一体性を整理し分業を進めていくことで、産業の発展や地域の近代化が急速に進んでいったという側面はありますが、人と人が出会い、ああでもないこうでもないと対話しながら模索していた部分は失われていった。

そこは一見「無駄な時間」とみなされがちですが、そのやり取りのなかで共有されていた価値や想いが果たしていた機能は実は大きいのではないかと。そこをいかに取り戻していくかという挑戦が、各種の「協同運動」なんだろうなと思うところです。

(3) 「プロセスとしての政治」理解

こうした分業化に伴う効率化について、職場で最も大きいのが「構想と実行の分離」という点で、「誰かが決めた仕事をただやるだけ」、「働く」ことは仕事をこなしていくための部品・道具でしかない、という認識になってしまいます。

この「構想と実行の分離」は、政治の課題でもあり、「どっかで誰かが決めたことを、市民が従うだけ」という認識が広がっていますが、そもそも「政治」というのは政治家がやる議会政治だけを指すのではなく、「みんなの想いを踏まえて決定していくこと」です。これは、人びと誰もが日常で実施していることであり、たとえば「友だちとご飯を食べにいく」ということも、一つの政治なんです。それぞれが食べたいものがあり、声の大きい・小さいがあり、使えるお金の額も違う。それぞれ個々のニーズがあるなかで、相互の関係性や力関係なども加わり、どこに食べにいくかが決定されるというプロセスがあり、その全体が「政治」ということになります。

こうしたことは、議会政治はもちろんのこと、職場でも家庭でもあたりまえのようにやられていることなのですが、それは「政治」とはみなされずに周辺化されている。でも質的には同じことであり、地続きなんだという認識をどれくらい広めていけるかということが、大きな社会課題・教育の課題としてありますし、協同の運動を進めていく上でも大切なことなんだろうと思います。

結果としてどこに食べにいくかということよりも、それを決めるためにそれぞれの意見がどれくらい聞かれているのか、尊重されているのかということが政治においては重要で、それが民主主義の価値ですし、「協同」にとっての生命線だと考えています。協同運動では、「みんなで決める」こ

とが大事にされていますが、本当に一人ひとりの想いを聴き取れているのか、「合意」というのが抑圧・フィクションになってしまっていないかどうかを常に検証し続けるということが、求められてくる課題としてあります。

(4) 一人ひとりの「声」を拾うための余白

そうした「プロセスとしての政治」という観点にかかわって、協同運動、協同活動で一番面倒くさくて大変だと言われるのは、「会議が長い、決まらん」という部分かなと思います。社会がどんどん変化していくなかでは、一つひとついちいち話し合っている余裕なんてないし、誰か一人が責任を持って決断してくれば、会議もなくて済むし、効率的だというのが、社会の趨勢のなかで広がっています（「決められる政治」）。

そこで失われていくのが「対話」という契機であり、一人ひとりの想いを聴き合い、それを共有化していくという部分になります。「決定」まで最短でたどり着くことが優先される状況では、そこに至るプロセス・余白は無駄なものとして排除されていくし、一人ひとりの想いは「雑音・ノイズ」として処理されてしまう。何か発言しようとすると、常に「結果」への紐づけが問われ、目的や理由が求められてしまいます。このことが、社会全体にすごく蔓延していて、子どもも大人も常に「何かしなきゃ」と追い立てられています。追い立てられれば追い立てられるほど、なんとなく目的なく集まるとか、ダラダラ喋るということが奪われていく。表面的には「無駄」とも思えるこの時空間に、実は物事を進めていくための重要な要素が含まれているということは、この間のコロナ禍で少し自覚化されたように思いますが、社会の趨勢を変えて

いくまでには至りませんでした。

それこそ皆さんの職場でも、コロナ禍以降はオンライン会議も広がったと思いますが、対面の会議とオンラインの会議って、同じ議題を同じように議論していても、内実はだいぶ異なってくるという経験はありませんでしょうか。あるいは、そこで決まったことを実行していく際に、なかなかうまく進まないっていうのが、全国各地で、世界中で体感されたことがあったかと思います。

業務に関わる伝達事項などはオンラインでも問題ないものの、モチベーションや想いの共有という部分は、言葉だけではどうしても難しく、話し方や雰囲気、さらには「その場を共有している」ということ自体からもたらされてくるものであり、それがオンラインでは難しい、ということかなと思います。

また、今日の総会でもそうですが、この会場に来るまでに「今日はどんな話になるのかな」という想像を膨らませていたり、休み時間での立ち話とか、帰る途中の振り返りとか、そういった部分の時間がけっこう重要だったりもします。これがオンラインだと、急に始まり終わったら切れてしまい、余白も余韻もなく日常に戻されてしまう（精神的にも身体的にも）。それはタイムパフォーマンスとしては効率的ですが、そこで奪われていることも大きいのだろーと思います。

さすがにこれじゃまずいなということで、あらためて対面で集まって会議をすることが見直されつつありますが、「人が一緒に何かをする」ということは、実務や効率・論理だけでは進まないということが、ようやく了解されるようになったということかなと思います。しかし、常に何かに追い立てられる日々では、どうしても「長くてもんどくさい会議」は忌避されがちで、

その傾向はますます強まっています。そのなかで、プロセスや余白をいかに確保していくか、それが「協同」の取り組みには不可欠な要素です。

(5)「みんなで決める」ことの難しさ

そうした「余白」あるいは「ともに在ること」の意義を確認した上で、それでもなお、「みんなで決める」というのは、口で言うのは簡単ですが、実際にそれを実現しようと思うと、かなり大変だということが分かります。

みんなが対等に意見を言える場になっていればいいんですが、たとえば職場に10年いる人と1年目の人とでは、その場に馴染んでいる度合いがまったく違うので、どうしても非対称性が出てしまいます。馴染めている人は、ふとした思いつきもそれなりに当を得ていることも多いんですが、入ったばかりの人だと、たとえば思ったことがあったとしても、「ピント外れじゃないか」と不安になってしまい、発言するのに相応の覚悟が必要になる、という違いがあります。

「なんでも思ったことを話していいよ」と言われていても、話した後の沈黙や困った顔を想像すると、とても怖くて言い出せない、という状態はよく耳にします。さらに、「正解」が重視される学校教育での経験に照らすと、どうしても「ここで何を言うことが求められているんだろうか」というプレッシャーがかけられ、「その場での正解が分からないから発言できない」となってしまいます。

年配者の側は、そんな「正解」なんてないんだとわかっていて自由に発言できるんですが、それは若者から見れば、「ちゃんと正解にかかわることを話せている」と見えてしまう、というギャップです。

そうしたズレ・すれ違いをどうやって乗り越えていけばいいか。それは、大人同士の場合や組織間の交渉などでも同様ですが、「会議の場だけじゃ絶対無理」ということが言われていて、会議の場は最終的な到達点でしかなく、その会議に至るまで、どこまで事前に準備できるのかが重要だとされています。

一緒にご飯食べながらとか、タバコ吸いながら交わされる雑談のなかで、相手の想いを聴き出し、意向を確認していく。そこでボソッと出てきたつぶやきを拾い上げながら、「それ、いいじゃん。今度の会議でぜひ提案してみてもよ」と促していく。そうした下準備を踏まえた上で、実際の会議の場に挑むことで、若者も気兼ねなく発言できるようになるし、いったん発言してそれが受け止められる経験を経ることで、次からは発言のハードルを下げていくことが可能になっていきます。

職場のちょっとした会議くらいで、そんなことしてる余裕はない、というのが現場の実情かなと思います。ごくごく些細な声掛けとか、その程度のものだとご理解ください。そういう小さな経験の積み重ねが、若者が参加しやすい場づくりにつながっていくし、民主的な職場づくりにもなっています。

そうやって、自分なりに意見を出して決まったことは、「他の誰かが勝手に決めたこと」ではなく、自分自身が決めた当事者になるということでもあり、その後の実行プロセスにおいても大きな違いが出てきます。

(6)「声が聴かれる」場の創出

このように、一人ひとりの声がどれくらい、どこまで聴き取られているのか、という点が重要です。「声をあげること」が大事だと言われますが、声を出すためにはそ

れを聴き取ってくれる相手がいて、場所があることが不可欠で、その部分抜きに「意見を言え」というのは、若者にとって抑圧でしかありません。

実際に出てくる若者の「声」は、「ウザイ」とか「しんどい」とか、要領を得なくて的外れなことも少なくないんですが、それは職場の文化に慣れていないことからくる語彙力のなさなどに起因します。その単発的な言葉だけに反応するのではなく、言葉の背景にある想いをもう少し掘り下げて、「何が、どうしんどいのか」を丁寧に聴き取っていくことで、ようやく具体的な職場のあり方が見えてきます。そこまで時間かけていられない、というのが現場の実情かと思いますが、実はその部分こそが、「人が育つ職場」の生命線だったりするのではないのでしょうか。

関連して、子どもの権利条約で「意見表明権」が謳われていて、こども基本法でも重視されていますが、その際の「意見」は、“opinion”ではなく“views”であって、明確な意思をもって言語化された「意見」というよりも、言葉にならない想いや感情も含めた「意図・見解」を意味しています。つまり、言葉として表明されていなかったとしても、苦しそうな顔してるとか、イライラしてるということなども「表明」として捉え、きちんと拾い上げていくことが求められてきます。

3. 若者協同実践で大事にされているもの

(1)「大人にさせる」若者支援の危うさ

以上のような観点を携えて取り組まれている若者支援実践を「若者協同実践」と呼んでいます。政策ベースでの「若者支援」は、

「働いて稼いだお金で食べていけるようになる」という「自立」が至上命題とされています。そこへどうやって早くたどり着くのか、「早く大人になれ」と追い立てていくことが、「成果」指標も含めて強化されています。

そうした「自立支援」の結果が成果で問われてしまうことの帰結として、「成果の出やすい若者への支援」が優先され、複雑な課題を抱えてなかなか効果が見えづらい若者への支援や、外在的な「成果」は見えづらいものの、若者にとって意味のある支援が周辺化されてしまうことになります。「成果」が求められると、そこに向けた効率性がたえず重視され、先ほどの「模索や試行錯誤」の部分は省かれ、「若者に〇〇させる」というかたちで若者は対象化されていきます。

しかし、形だけ就職させたとしても、その土台形成がきちんとできていなければ、たいていの場合は途中で続かなくてドロップアウトしていきます。それが当の若者にとっては「支援を受けて就職できたのに、またダメだった」という否定的な経験となり、徐々に傷も深くなり苦しくなってしまう。その意味で、若者支援においては「就職できたかどうか」よりも、「働ける自分の獲得」の方がよっぽど重要で、さらには「働く」という以前に、自分の人生の主人公になっていく（＝社会のなかに生きる主体の形成）という部分が決定的だということが言われています。

（２）「みんなで一緒に何かをつくる」営み

政策的な動向に抗い、「豊かな若者期」の保障を大事にした実践は、各地で多様な方法で取り組まれています。それら実践に共通しているのが、「〇〇づくり」の活動、「みんなで一緒に何かをつくる」というも

ののです。

たとえば「居場所づくり」は、世間の「働かなきゃ」とか「社会参加しなきゃ」という圧力を一定程度相対化し、自分たちで居心地のいい場所をつくるという取り組みです。そこでは目的とか意図とか成果にはとらわれずに、ただ「居ること」が保障される場です。

これは若者支援だけじゃなくて、社会全般でどんどん失われているところでもあるんですけど、さっき言った余白を増やすっていうことと重なるし、自分が自分でいられる場所を、理想としては自分たち自身でつくれるようになっていく、そこを目指して支援が展開されています。

大人たちが用意して、そこに「お客さん」として若者をお迎えするのではなく、若者たち自身が、「どうやったら自分たちが自分らしくそこでいられるのか」っていうことを模索したり試行錯誤したりしながら、その場をつくっていく、運営主体になっていくことが重視されています。その居場所のなかにも古参者と新参者がいて、だんだんその場になじんできた先輩の若者が、新しく来た若者をサポートしたりしながら、場になじむように働きかけをしていったりもします。本当にこれはもうミクロのレベルでの民主主義、自治の空間がそこに展開されています。

（３）仕事づくり・地域づくりの活動

仕事づくりというのは、まさに「協同労働」ということですが、まず仕事ありきでそこに人を当てはめていくのではなく、人に合わせて仕事をつくっていくという営みになります。一般的な「就労支援」では、働けなくなった若者に力をつけて、また就職できるように応援していく、つまり「若者を変える」という目線になりがちですが、

仕事づくりのほうはむしろ逆の発想で、環境の方に働きかけていくというかたちになります。

そもそもその若者が失業状態にあるのは、その若者が活躍できる場所・機会がなかったからだという認識に立ち、その若者が持てる力を使って活躍できる場をつくっていく、という方向性です。「障害」理解などでも同様ですが、個人に問題があるのではなく、個人と社会との関係・あいだにこそ問題が生じているのであって、そこをきちんと捉えていく必要があります。

たとえば都市部では、「使えない」と言われて職場を追われたり、なかなか採用されなかったりということがありますが、高齢化の進む地方部では、そもそも人が全然いないから、「若い」というだけで重宝されて、地域の活動やお祭り・行事なんかで引く手あまたになったりもする。あるいは、買い物難民状態になっている高齢者の買い物代行のニーズなんかも高い。雪国では、冬場は雪かきの仕事なんかもありますね。ただ、いきなり地域の人と若者とが出会えるわけではないから、その両者を橋渡ししフォローしていく役割が必要で、そこを若者支援スタッフが担っています。「活躍できる機会を求めている若者」と、「若い人に活躍してもらいたい地域」とを結びつけ、両者にとって意味のある出会いを創出していく。そんな取り組みが、特に地方部で始まりつつあります。

今は人口減少社会とか、「消滅可能性都市」などと煽られ、各地で「地域づくり」の必要性が唱えられていますが、そこで何がされているかというと、他の地域からバリバリ働いて子どもを産んでくれる若者を呼び込んでいくという、「若者誘致合戦」のような事態も起きています。地域おこし協力隊なんかが格好の道具として用いられ

ていて、それでうまくいっている地域はもちろんあるんですが、結局のところ「若者獲得競争」にしかなく、地域間格差はいっそう開いていく。ふるさと納税なども同様ですが、競争・パイの奪い合いにはあまり未来はなく、誰もが疲弊していく構造にしかありません。

地域おこし協力隊の課題の一つに、「他地域から」という条件が課せられているという部分があります。その地域にもともと住んでいる若者は対象にならず、他の地域から入ってくる若者だけが対象になる制度であり、地域のなかで出番を見出せず埋もれている若者には、最初から光が当てられていないという問題があります。

しかし、地域のなかには病氣療養後の復帰ができていない人とか、障害を抱えている人とか、ひとり親で両親に支えられながらどうにか子育てに奮闘している人とか、属性は違えども、いろいろな若者がいます。そうした若者たちに呼びかけ、地域づくりの担い手として活躍してもらおうという動きが、これまた地方の実践から立ち上げられています。

(4) もう一つの暮らしづくりへの挑戦

「若者支援」というと、どうしても「若者を支援する」とみなされがちですが、当の若者は「支援」を求めているというよりも、「活躍できる場所」を求めているたりします。

その活躍の場を、どうやったら暮らしを成り立たせられる仕事にできるか。経済的な観点からすると、その実現はなかなか難しい課題ではありますが、「生活に必要なお金を稼ぐ」というだけでなく、「生活に必要な支出を減らす」（お金の介在しない物資のやり取りや、シェア・支え合い文化の醸成など）ということもセットにして、

どうにか暮らしを成り立たせようと挑戦しています。

この挑戦は、もう少し大きな目線で捉えてみると、「経済を暮らしに埋め戻す」という側面があります。資本主義社会のなかで、経済はどんどん高度化していますが、本来は人と人が互いに協力しながら生きていくための手段に過ぎなかったはずです。しかしその手段が肥大化していくにつれ、「経済を回すために人が動く」となり、暮らしが経済に従属するものになっています。その経済の原点に立ち返り、地域づくりや人と人をつなぐ手段としての経済を取り戻していくという試みが、地方部で少しずつ始められています。

さらに、家族主義的な規範が強い日本の暮らしを、いかに「家族」のくびきから解放していけるか、という挑戦も進められています。「家族と暮らす」「ひとりで暮らす」という二択が迫られがちな状況に対し、「仲間と暮らす」という生活を実践していく試みです。

実は「ひとりで暮らし」ってとても非効率的な暮らし方で、炊事や洗濯・掃除なんかもわりと無駄が多い。数人分まとめて作った方が簡単だし、労力も少なくて済む。こうした「暮らしの共同化」の試みが、都市部ではシェアハウスなどのかたちで展開されていますが、支援領域でも、大きな民家を借り切って共同生活を営みつつ、いろんな地域活動にもかかわっていく、という活動が広がっています。

親子関係を中心につくられる家庭だと、どうしても「親が決める、子どもが従う」となりがちですが、対等な仲間での暮らしづくりだと、掃除とか食事とかのルールを自分たちで一つひとつ決めていかなきゃいけない。そこでけんかも起こったりするけど、そうやってけんかするなかで、相手の

意見を踏まえながら何かを決めていくという、自治・共同決定の政治を学んでいくことができます。



以上の実践をまとめると、「若者を支える」「若者を支援する」というよりは、「若者が生きられる社会を若者と一緒につくっていく」ということであり、それを「若者協同実践」と呼んでいます。そうした活動にかかわっていくなかで、徐々に若者も力をつけていき、元気を取り戻していく。

この「目的」「手段」「結果」の関係・順序がとても重要で、こうした実践で大事にされている目的は「若者が生きられる地域・社会の形成」で、その手段としてさまざまな活動があり、結果として若者が育っていく。こう整理することで、「課題」を若者の側に置くことなく、社会の側に向けていくことができるし、若者の主体性を（結果として）育んでいくことができるようになっていきます。

今回は、「若者支援」のさまざまな挑戦から拾い集めてお話ししましたが、「若者が育つ場づくり」は、もっと普遍的に、皆さんの職場の小さな取り組みのなかにも含まれています。仕事の合間の立ち話とか、業務の振り方とか、いろんな場面で若者の声が拾われ、それが場づくりに影響を与えていくという契機は、たくさん転がっています。目新しい・華々しい実践を聴くことも新鮮でおもしろく感じますが、日々の日常のなかであたりまえのようにやっていることのなかにある実践的価値・意義をあらためて振り返り、可視化していくということも、大事な作業なんだろうなと思うところ です。

4. 「協同」の経験をいかに保障しうるか

最後に、「協同の経験をいかに保障していくのか」というテーマを掲げてみましたが、これはとても大きな課題であり、そう簡単に答えの出せるものではないと思います。なので、皆さんと一緒に考えていくことが必要だと思っていますが、そのための要点をいくつか整理してみました。

(1) 身体を通して「体感する」こと

まず一点目が、「言葉での伝わりづらさ」という点。タイトルで「学び、体感する」と書いたのはその部分で、「理念を学ぶ」というだけで人は動かないし、本当の意味での理解にも到達しない、ということです。「対話や自治は大事だ」と頭では分かっている、でも、日々忙しい毎日のなかでは、どうしてもめんどいししんどい、という想いも感じてしまう。

でも、何か必要に迫られて、実際に「みんなで決める・つくる」という体験してみると、すごくおもしろくて手ごたえも感じられたりするし、「またやってみたい」となったりもする。途中でトラブルとかすれ違いも起きて、バタバタしちゃうことも多いんだけど、そうした右往左往が大きいほど、やり切った際の達成感や満足感は大くなる。それは「頭」で理解するものではなく、感情も含めた身体全体で感じ取られていくものであり、その意味で「とにかく、やってみる」ことが大事だということになっていきます。

こういう講義形式の講演会が典型ですが、理念の話はどうしても「説得」になってしまいがちで、聴く側は受け身にならざるを得ない部分があります。それに対し、対話形式で進めていく実践の話は、自身の

わからなさや戸惑いに即して理解が進められていくので、「納得」へと到達しやすくなります。

たとえば体験した後の振り返りの時間って、とても重要な学びの機会であり、そこで知識が「自分のもの」として血肉化していくんですが、対話的な振り返りの場合は、「言語優位」になってしまうことも少なくありません。そこでは、「想いを言葉にすること」がうまい人が主導権を握り、なかなか言葉にならない人の気づきや想いは周辺化されてしまうということも生じてきます。

それに対し、「あえて沈黙の時間を3～5分設ける」という取り組みがされることもあります。日々忙しく何かに追われていると、なかなか「じっくり振り返る」という機会が持ちづらいものですが、なかば強制的にそういう時間を持つことで、気持ちを整理することができるようになります。たとえば職場の会議でも、いきなり「話しましょう」とするのではなく、いったん「考える時間」を用意してみるだけでも、声の出しやすさはだいぶ違ってくるという側面があります。その場に慣れたベテランであれば、そんな時間なくても発言できますが、まだ場に慣れていない人は、その場になんとかついていっただけで精いっぱい、「何か話せ」と急に振られても整理がつかなくて黙ってしまうことも少なくない。でも、何も考えていない・感じていないなんてことはほとんどなくて、うまく助走や補助があれば言葉にしていくこともできたりします。

(2) 公私区分を乗り越える

もう一点が、「自治や協同なんてめんどくさい」と忌避する若者は少なくないですが、そんな若者たちも、実はいろんな場面で自治・協同を実践している、でもそれが職場などとはつながっていない、という側

面です。

友だちとどこかに遊びにいくとか、旅行にいくっていうときに、どこに、いつ行くのかということは、みんなで話し合いながら、調整して決めています。そういうインフォーマルな生活場面であたりまえにやっていることが、職場などフォーマルな場での活動とは切り離されていて、まったく結びついていないという課題があります。

だとすれば、「自治・協同の経験がない若者にどう教えるか」ということよりも、「ふだんやっている自治・協同をこの場でも出していいんだよ」という回路をいかに切り拓いていくか、という課題が見えてきます。若者にとって未知な世界の魅力を伝えるんじゃないくて、実は若者のなかにある協同の契機、経験、それを膨らませて豊かにしていく。そのことが、実は若者を育てるってことなんだということです。

自分たちが日常でやっていることを、「ここでも出していいんだ」と実感できるようになっていくと、仕事に対しても「手応え」を求めてもいいし、自分を出してもいいんだということが了解されていきます。それが「協同」の取り組みを広げていくための土台になるし、より広く捉えれば、社会のなかにある公私区分（パブリック／プライベート、フォーマル／インフォーマル）の分断を乗り越えていく契機にもなっていきます。

（3）社会づくりの実験場を創出すること

この課題は、職場だけで解決することは難しく、幼少期からの教育・社会経験も含め、広範な社会課題としてありますが、「パブリックかつインフォーマル」な領域をどれだけ豊かに社会のなかに広げられるか。「形式」よりも個々の想いに即して対応していながらも、「個人的なこと」ではなく「み

んなのため」でもある、そんな活動領域です。

最初の方にお話した、社会の分業化（システム化）のなかで徐々に周辺化され、衰退を余儀なくされてきた部分ですが、地域づくりや市民活動、社会運動など、そこで展開される活動が、「公共・市場・家族」に代表される他の3領域にも影響を与え、社会をより豊かなものへと変えていく実験場という性質も持っています。共同購入から始まった生協運動が、企業主義的なスーパーと競合しながら渡り合っていくとか、大手金融に対し、信金や労金などが地域の関係ベースで活動を持続させているとか、場面ごとにいろいろな展開が広がっています。

そうした「柔軟な実験場」（〇〇づくりの活動）を、皆さん自身の職場でもそうだし、家庭生活、地域の活動、いろんなところへどんどん開いていく。そういうことを積み重ねていくと、すぐに結果は出ないかもしれないけど、社会そのものがより豊かになっていくし、若者が豊かに育つことができる社会につながっていくんじゃないかなと思います。



ということで、かなり抽象的な「捉え方」「観点」みたいなかたちでしかお話しできませんでしたが、「じゃあ実際に現場はどんなのか」ということは、後半の実践報告で皆さんと語り合いたいと思いますし、今日のこのシンポジウムが終わったあと、自分の職場・現場に帰ったときに、今日の話を目の前の現場に置き換え、同僚や若者と一緒に語ってみていただければと思います。